

またあおうねのやくそく

年中・石井 壮

まちにまったなつやすみがきた。おきにいりのぼうしにむしあみ、むしかごじゅんぴはできてる。ぱばとおねえちゃんとせみとりに行った。でも、ぼくはつかまえられなかった。

かえりみち、くらいみちになにかがおちているのにきづいた。ぼくは、ひっくりかえっていたせみをつかまえた。ぼくはてのなかでちからづよくはねをうごかしながら、ちからいっぱいなくせみにおどろいた。むねがどきどきした。ぼくはいそいでおきにいりのむしかごにいれた。

ぼくはいそいでかえってずかんでしらべた。「ミンミンゼミ」つちのなかでなんねんもくらすとかいてあった。きつとぼくがあかちやんだったときからつちのなかについて、なつがくるのをずっとずっとまっていたんだ。ぼくもなつやすみをたのしみにしてきたけれど、もっともっともーっとたのしみにしていたのだ。

ぼくはつぎのひにせみをにがしてあげることにした。このなつをたのしんでもらうためだ。かごからだすといっぱいっぼぼくのゆびをのぼった。こゆびのさきにのぼるとおおきなそらにとんでいった。

ぼくは、ゆびきりげんまんをした。つぎのなつやすみがぼくもたのしみだ。